

陶犬新書
中

5 曾 4
431
2





陶如新著卷之貳

目錄

- 水の傍 ○まゝと石竹 ○飯取のり
- 燈心草教の誦 ○水滸傳人數の三の教
- 東醫實録の珍書 ○土風俳諧 ○猫に
- しゆけ流 ○禍とり小歎の火取食す ○物祖
- 孫が語河夜うら ○天の噂ふら ○薬
- 陀 ○おまの菓子 ○畑外 ○鶴の卵
- 淳化紙 ○未熟の藝の誇 ○松檉垣

○發故傳の○純の文字○酒の價○せん
 とし花○耳露門○佛良機○毛髪
 の辨○馬額○東の野州○對のうんもの
 ○堆米堆里○やうし角○遊擊兵器
 ○柿の蒂の柴椀○一日に二食○茶の湯
 いたまのしき車○茶の湯○まの磁きの
 の手○珍説家○花生のしきかきふ○
 北才○鈴の鈴西施舌○七哀○石照
 頭○倒影○石炭○播紳○若木のしき

陶如新 著 卷之貳

浪速 中 洲 漢 史 漫 撰

水の價

浪華のく水一荷故賣るに。河の遠近不
 均の。又餅ハ餅。或ハ十五六餅ノと重る。物
 類ハ第里モかきもや。事又類聚別
 集十曲卷に。筆後引て。孫之翰。人
 嘗與一硯直三十千。孫曰硯有向
 異而直如此之價也。客曰硯以石

為貴。水石河之別水流。孫曰一日
 呵得^一權水^一終直^三鋪^一得^一狀^一何
 用^一遂^一不受^一。因^一以^一今引^一と^一の^一率^一文
 顔^一聚^一ハ^一案^一の^一所^一居^一崎^一雅^一嘉^一先^一生^一の^一子^一に
 座^一右^一改^一を^一れ^一つ^一て^一き^一著^一に^一何^一が^一ち^一と^一い^一ひ^一し^一る^一。
 又^一漢^一土^一元^一今^一に^一な^一り^一ず^一。座^一右^一の^一著^一と^一す^一る^一と^一足
 之^一。西^一庫^一全^一著^一撰^一要^一に^一論^一し^一て^一い^一ふ^一。精
 審^一に^一お^一ん^一に^一お^一も^一ず^一。然^一れ^一ど^一元^一著^一の^一著^一作^一の^一
 大^一低^一刪^一摘^一し^一て^一完^一と^一か^一ず^一。獨^一この^一著^一に^一載

ナ^一に^一高^一ハ^一か^一り^一ず^一全^一文^一故^一樂^一子^一に^一故^一に^一お^一買
 遺^一帙^一の^一篇^一勝^一あ^一り^一。微^一す^一り^一に^一た^一る^一ま^一り^一
 著^一す^一り^一。と^一し^一も^一實^一に^一前^一著^一の^一詩^一文^一故^一帙^一の^一
 於^一け^一著^一す^一る^一全^一文^一故^一を^一し^一と^一著^一と^一多^一く
 あり^一し^一こ^一在^一行

漢^一土^一元^一ハ^一著^一す^一る^一故^一帙^一に^一在^一行^一と^一い^一ふ^一。自^一然
 不^一生^一と^一い^一ふ^一脚^一巴^一に^一を^一れ^一ひ^一く^一故^一聖^一徒^一と^一い^一ふ^一。蘭
 江^一李^一の^一竹^一譜^一詳^一録^一に^一在^一竹^一京^一都^一人^一家^一
 好^一種^一之^一階^一砌^一之^一傍^一。叢^一生^一葉^一如^一行^一莖

細亦有節暮春花年枝抄。或白
或粉紅色。或有紅紫暈。或重葉
多葉不等。惟深朱般色者最為
難得。花盡有子成房刈去再生。
至秋又花仍如春盛。亦有野生
者。今處有之一名嬰麥。とらふ

飯おのほとらふ

寛保二年。為永太郎為の作。百合雅
高藤軍記に。おのほ時分やごされは

かりと有。すう長の板せいすの抄。以形のお
とがひにおのほはぶのと有。すて飯のりなり。
今を粉少き家に。曲もの大きを飯櫃故。
おのほつとらふ。飯櫃とらふなり

燈あかりいすの数の論

油盡に。燈心の紙の数のいすれば。夫とす
いす事。節儉家の考へておまひに。櫻花
は少くともえこり。けき善い場ぬ殿下の清況は。
山科道安。年暮にせし。善されば。かくの

ごき焼心。事まぐ。市税ある事。きく。思ひ。に。柳。院。庭。の。市。説。城。家。照。公。の。市。歌。一。と。人。半。に。焼。心。成。ま。る。真。成。た。て。る。也。丁。に。す。れ。バ。花。を。法。に。つ。る。由。さ。り。と。の。玉。お。滞。る。る。事。す。て。心。成。用。い。ま。る。り。有。さ。か。ら。ず。や。世。の。中。に。多。く。九。其。々。と。し。し。り。乾。ま。の。さ。し。心。付。ず。燈。の。く。き。ま。に。燈。心。成。幾。す。と。れ。く。用。ゆ。れ。の。真。成。ま。る。事。に。似。こ。さ。こ。て。あ。た。ま。き。り。さ。り。

水滸傳人數、三の數

又海林沙に。宋徽宗時。山東賊宗江等。三十六人。聚衆。横行。官軍莫敢攖其鋒。元成帝時。花山賊畢曲等。亦三十六人。聚集。莒山。出沒。無忌。官軍不能收捕。二賊相類。而三十六人。宋江有一丈青。花和尚。而畢曲中。亦有一婦人。一僧。最勇健。豈皆天罡之數耶。之。在。の。奇。數。と。い。ふ。さ。り。也。人。數。

三代の以百八人とせし事、其の在るべき故一幸とん天
水津傳の奇やハ志なきなり

東醫實鑑の序

善籍の皇朝に多く傳へた事、後世の
何れ。醫書そのうち見きり志多し東醫實鑑
ハ朝鮮の本を以てし。漢土ハ珍貴とし
多く見高らぬと見ゆ。表子女の子不語
蕭山、李選民、少年個箇、燒香佛廟、見
養女在焉。西顧無人、遂與通語、其自

言性異、知無父母、依舅而居、舅母凌虐、故
在、其禮佛、願得佳耦、李以言挑之、女唯
遂與歸家、情好甚篤、久之、李體日羸、
覺交接時、取其精、與尋常、夫婦
不同、且十里以内之事、必先知之、心知、人爲
狐、驅之、無法、一日、在其友楊孝廉、至三
十里外、以情告之、楊曰、我記、東醫實鑑
中有治狐術一條、何不試之、遂偕往、疏
璃殿、覓得是書、求東洋人譯、而

行之。甘果漢法去。此奉。余在西江。謝蘊山太史家親見。楊孝廉為余言之。惜未問其東醫寶鑑中是何卷。負之有。隨園以高名之大家。必何者。黃西里集。危何之。きた。かく。志。る。き。く。不。攻。者。と。就。奉。推。て。志。多。ん。

古風俳諧

無不親王。美。善。の。を。草紙に
若

うと竹の杖。下と。と。せ。若。の。板
を。三。橋。の。長。柄。や。は。く。く。み。う。と。
ま。し。つ。げ。ら。ま。る。あ。の。甲。意。の。か。

夏

ときと。虫の。落葉。も。祿。あ。い。と。る。山
ほ。こ。影。飛。小。夜。や。く。ま。の。火。う。ら。石
ま。は。ひ。の。火。い。つ。ち。り。あ。の。か。白。邪

秋

名。月。の。お。と。す。ん。山。の。名。な。い。う。の。こ

けい船やくれまわく船田川
白雲むらむらけりや鞠の宿
を

すこをれやたむしにひえいせきう京
松風に雪ひらめくやまゆのうら
らあまにすすけすさちうのふ
又あまのてまに

まんねにぢれどまきまうの卯
まふ川と天にれう川すすくを

まふまのいふさうまや結を纏
花をまの唯まの粒赤の卯
舞の後和舟河河の蝶も知
深まふみれ花めりやのす
花をのうらや小町ゆさくら
風のおぼる花に鐘撞のれまのれ
秋軍文武二道の桂か
春啼やけめの高名けりま
けの子にゆをすつまやまがま

名なきれ氏や椿けしきす
 堂けりみ川の背中のやいこふ
 故くゆをるを寝ゆゆこゆ。夜す却
 六月雨や山きみゆの空のきこゆべん
 風をとりいひるかにひしく病が
 かく川こもるぬぬ身もの暑けつを
 ふおふする夢やけきさつからめき
 山のしきすせふきんらんの花は本
 山猿も侍にのけらいつちめりれ

西宗因
 門人時
 初推中
 既世の愛
 白
 まさか
 中ふ
 きた
 手んを
 中んを
 中んを
 中んを

皆くのひるきぬのた袖や秋の月
 月いひるふひに三千せかられ
 月影のおるきり雨やふ老門
 けしむいぬにむゆふお禁の軒
 何の徳の人ぬぬきひよふはゆき
 天をさくぬぬきさるんを村時雨
 雲花もさくんとくさるりやう那
 けりぬにさすひもさるりやうのそ
 おつこしきさるりさると厚あ氷

うる能哉の直代の白濁と遠ひ能哉とふる
又字のま意にけりてあつてに免申。

猫にさつげり

軍法富士見西行とふる。沙路理に。猫にけり
つげりの能有とふる有。これい古語に猫
有軟血能。虎有起尸徳とふる幸あり。
又祖苑死聯芳集に。贈猫児僧大川。
釋周信の詩に。大慈悲種小斑々。
軟血切能也。是閑。首尾直字聯

子正。不知走却屋頭山と有猫紙相す
るに。首尾直字一瞬正。きびやとす
る。萬寶全書。又ハ不求人にさるる
す。美寶全書。数本あり。明本五古
枚のちに有。

禍とふ歎い必以食す

禍とふ歎い必以食す。竹紙有。作者種
引著紙縁して博覧とふと申。まうれとまう
とふげらるるに似て。表禍の事故詳に

廿。赤雅仁福斗。似大而食火。糞噴火
作殃不祥甚矣。又原化能に以義
典。吳堪為縣吏。家臨荆溪。忽得大
螺已而化女子。號螺婦。縣令聞
而求之。堪不從。乃以事。盧堪曰。今
要。蠶。蟬。毛。鬼。臂。二物。不獲。致罪。堪
語。螺婦。即致之。令。諺。語。曰。更。要。福
牙。堪。又。語。螺婦。曰。汝。歎。也。須。更
幸。至。如。大。而。食。火。糞。以。為。火。令。子。火

試之。忽遣糞燒縣守令及一家皆
焚死焉。と云。虛實以諦すべきにあらず
唯奇哉抄すものぞ

物祖徠が堀河存うもの

物祖徠が土佐坊昌俊。堀川亭に憩ふ
事以著す。其又事以よからすと云。堀川拱園
彈弓。譯。又。要。訣。と。云。善。哉。作。記。す。の。凡
文に。近。時。我。邦。人。文。隱。盛。る。れ。と。云。詩。賦。文
章。工。未。し。其。高。絶。代。極。也。と。云。物。在。卿。

文をどの。人口に膾炙すれど。あるものありこれ
 地をば。一向に格毛。調え。法を。れき。倭文の真
 字の。夢の。極を。新その。あり。後進の。まを。生を。ど。
 これ。等。の。又。故。字。び。北。轉。の。意。に。く。れ。了。と
 思。ふ。故。に。今。其。一。篇。以。彈。改。し。て。後。人。の。急
 登。に。備。ふ。見。ハ。好。ん。で。前。情。以。議。す。れ。あ。ら
 あ。げ。ず。文。章。如。此。止。ま。ら。ず。和。玉。の。人。に。毛。愧。さ
 事。れ。多。し。に。其。一。益。も。も。さ。る。ん。と。おも。ふ。ま。の
 こと。に。か。ら。ん。す。れ。る。に。傳。也。と。り。又。山。中。北。山

元祖徠城彈改す。其。善。有。靈。和。義。端。又
 想。周。北。山。の。改。文。城。又。彈。改。す。善。名。以。文。章
 獨。臭。と。し。席。又。に。惡。紫。怨。其。亂。朱。也
 況。於。猶。棄。薰。乎。近。世。晚。學。子。膚。又
 以。茵。為。羨。如。穢。柳。之。轉。丸。意。柔。揚
 不知。其。臭。反。笑。薰。水。馨。於。是。同
 柔。相。求。逐。臭。之。徒。倡。之。而。繼。鼻。和
 海。肉。文。林。殆。將。壞。成。伊。蘭。葉。今。不
 遠。繹。之。十。年。尚。猶。有。臭。因。詳。辨

薰蕕而為一篇。命以蠲臭。嗚呼。海
 內之廣。更有生牛頭旃檀乎。伊
 翁臭惡之氣。永絕焉。予雖不敏。
 謹自斯篇始。實改庚申老十月
 庚子。墨浦靈松龍鱗翁義端撰
 此不敏。應道不跋有。又北山。改文以彈
 改才於序文下。東都有山。亦氏者。在信
 有字。喜六號北山。稟性驕傲。執心放
 肆。口無蘭綸。妄說弗悛。乃著文章

以歷詆本非諸作者。亦做皆川氏。竄攻物
 子前。又別撰出一篇。蓋又款以箇套薰
 其臭亦甚矣。而友浪華。彼安道者評
 之曰。北山之於物先生。猶蟲脚與馬足
 豈誣也哉。其社中亦有一二之評。而請即
 詳評之。即報曰。即當讀皆川氏。正
 文。梅腹數次。今讀此篇。胡盧百轉
 乃欲異日得禪暇。而詳辨之。故姑笑而
 置焉。今冬偶無事。乃詳辨之。併及

皆川氏。平山。豈好辯哉。亦出平爾者。反
乎爾者也。と又評しり。拙哉。皆川氏之文
也。其不可敵。物子者。固勿論矣。於其
門下之人。亦不可當也。而舉趾高志不
降。者。所謂慳。歸之怒。臂。其勇。可喜
其愚。可憫也。と評し其是。世の事。い
あ。孫と云。物子の善。少。於。年月。ハ。文治九年
十月十三日とす。東鑑。少。比。十七日とす。其。介
異。曰。十月。と。評。し。る。事。也。和。學。者。流。の。や。い

よ。吉。長。山。本。の。平。家。物。結。の。事。十。月。十。三。日。と
す。物子の事。故。云。す。わ。く。の。こ。と。と。お。り。と。云。文
章。の。事。も。於。文。よ。り。と。云。る。事。と。い。思。ひ。は。す。ず

天ハ物ハ無ク

世の中の人己の心にはまをぬ事。可。れ。バ。天。道。也。是。の。非
の。と。い。ひ。て。歎。息。す。謀。に。愧。了。へ。き。事。あり。公。是。事
子。能。に。よ。劉。子。曰。天。可。敬。而。不。可。恃。也。鬼。神。ハ
可。敬。而。不。可。諂。也。と。有。り。れ。ば。道。哉。行。ハ。為
一。言。道。理。と。云。ふ。の。行。む。改。す。る。事。も。又。是。は。い。し

乃仁義の道哉。おまのたましく道哉行ひし人の言
祓也。天道は慈むるなり。これこそ世俗にこそ諱語
よむ。神は去らずといふべし。たとふ夜妻の時、代知ら
ず。夜妻の所業を託けり。その夜妻の心に、其やうに
時哉遠く乎。人に去れども。一言の稱受す。人
なきこと。天道は是。非のともなき。每人一笑せぬ。あ
ら。為すべき道哉行ひて心に任せぬとて。天道はう
らむ。かの夜妻とおれし。こゝろさすや

華陀

稱譽也。んとて却て其人の徳は扱ふ事多し
世俗にむきよ引倒し。とりよる。菅の
雷とて。宗徳院は天物とす。如。華陀の
術をまゝかろの如し。宋葉夢得が玉函稟書
に。華陀固神醫也。然范曄。陳壽。詭其
治疾。皆言若葭。結於内。針藥所不能及
者。乃先令以酒服麻沸散。既醉。無所覺
因剝割。破腹背。抽割積聚。若在腸胃
則斷裂。滿洗除去。疾穢。既而縫合

傳以神膏西五日創愈一月之間皆平復
 以決無之理。人之所以為人者以形而形之
 所以生者以氣也。陀之藥能使人醉無
 所覺。可以受其割割與能養使毀者
 復合則吾所不能知。然腹背腸胃
 既已破裂斷壞則氣何由舍。安有知
 是而復生者乎。審陀能以則凡受
 支解之刑者皆可使生王者之刑亦無
 所復施矣。太史公扁鵲傳。託說廢子

之論。以為治病不以湯液醴酒酒纔
 石搗引而割皮解肌。杖繩絡滿洗
 腸胃。軟滌五臟者。言古俞跗有是術
 耳。非謂扁鵲能之也。而世遂以附會於
 陀。凡人壽夭死生豈一醫工所能增損
 不幸疾未必死。而為庸醫所殺者或
 有之矣。未有不可為之疾而醫可活也。
 方書之設本以備可治之疾。使無至於人
 傷而已。扁鵲亦言。越人非能生死人也。以

當生者。越人能起之耳。故人與其因循
疾病而受欺於庸醫。好奇無驗之
害。不若稍知治身。攝生於安樂無事
之時。以自養。其天年也。といふ語に世の
中の人。數醫者に欺むる事多し。中々
いさし所人の。金銀のお徳として。手代支配人
おあり。肩代ひり。是類に教むを。種々勘弁
すれども。一念に於る疾を必死とみゆれば。心
數醫者。梅樹子に任せし。心代金銀のお徳程

用ひず。命有り。金とりある。知らば。類に似る也。

おーえの菓子

續博物志に。後漢顯宗純政引く。その語
以糖作。按。楓形。號。楓糖。といふ。おー
まの菓子。の形の各に糖より。又文字
呼て。志。より。き。なり。

烟斗

烟斗。といふ。烟。處。坂。舎。と。記。や。う。に。思。ひ
し。に。國。史。補。に。李。舟。得。村。舎。烟。斗。

截^テ以^テ為^ス笛。紫^ニ如^ク銀^ノ石^ノ以^テ遺^ル木^ノ子^ノ年^ニ吹^ス
 笛^ヲ天下^ニ第^一。月^ノ夜^ニ泛^シ舟^ヲ吹^シ。俄^ニ有^リ客^ト
 呼^ブ船^ヲ請^フ載^シ。既^ニ至^リ請^フ吹^シ之^ヲ。其^ノ聲^ハ精^ニ壯^ニ
 山^石可^レ裂^レ。及^テ入^リ破^レ呼^ブ吸^シ盤^ヲ擗^リ意^ヲ毒^ク
 粉^ト碎^ク。客^ヲ不^レ見^ル疑^フ蛟^ノ龜^ノ也^ト。と^レ小^ノ竹^ノ
 譜^ハ詳^ニ綠^ニ菁^ニ六^ニ卷^ニに。煙^ノ竹^ノ一^ニ出^ル江^ノ廣^ニ
 間^ニ。形^ハ狀^ハ一^ニ如^ク水^ノ竹^ノ。亦^ニ有^リ如^ク淡^ニ竹^ノ者^ト。
 但^{シテ}節^ハ高^ニ而^{シテ}葉^ハ密^ニ。竿^ハ色^ハ淡^ニ綠^ニ。成^ル
 竹^ノ時^ハ節^ハ葉^ハ間^ニ。便^ニ生^ル墨^ノ煤^ノ莖^ト。若^シ氣^ハ煙^ト

薰^ノ灼^ト。然^レ故^ニ名^ス。或^ハ亦^ニ名^ス黑^ノ包^ト濟^ト。源^ハ一^ニ種^ト。無^ク
 黑^ノ煤^ハ包^ト。但^{シテ}破^レ作^リ篋^ト。包^ハ雜^ニ青^ニ莖^ト不^レ純^ニ白^ニ。
 故^ハ亦^ニ名^ス煙^ノ竹^ト。雜^ニ用^ス惟^テ筍^ト可^レ食^スと^レい^フ
 之^レを^レ其^ノ總^ニ叙^スと^レ多^ク

鴉の味

ある時^ハ油^ノ海^ノ邊^ニに^テ拾^リ者^トと^リ。大^ニま^ニの^ニ半^ニ斤^ト
 の^ニや^リを^レ執^リて^レの^ニ故^ト。烹^キて^レお^シて^レ事^ヲ有^リ。其^ノ味^ハ奇^ニ
 し^クと^レ食^スま^ニもの^ニに^テ何^レぞ^ト。唯^テ齒^ハぎ^レれ^トく^トか^レ
 齧^ル事^ハあ^らま^にに^テ羨^ム申^ス。い^ふる^ニ執^リま^ニもの^ニ何^レぞ^ト

鶏の雛ヒナをよそひて。長崎ナガシキより、さきサキの黄ワウ雛ヒナが、
ちやうとく、いふこと思ひきから、座ザ無ムに換カ換カて
啼ナく、いふ。や、淮南淮南子子に、見ミ南ナン子子と。天下
無ム粹クニ白ハク狐コ。而ニ有リ粹クニ白ハク之ノ菜サイ。招シ之ノ衆シュウ白ハク也也。
善ニ學マカ子シ者者。善ニ齋サイ王王食シ鶏ケイ。必ズ食ス其ノ雛ヒナと
有ル足ヲ皮ヲすくれきキの。疑トとる多クし。人ノ
座ザ在リの淮南淮南子子すら。か見え、一ニ世セ一ニ獨ドク
恥チ愧クワイす、孰ナクの。

淳化紙

淳化通寶の紙乃。其善の宸翰なり。晋
公譚綽に。前世紙文未有善者。淳化
中太宗始以宸翰為之。既成以賜近臣。
王九之有詩云。誦官無侍突。無烟唯擁
琴。善畫日眠。還有一般勝。趙壹。囊
中猶貯御書紙。といふ。太宗の筆
を紙にと取去る。

未熟の藝の誇

東齋詠事に。歐陽永叔。每誇政事。

不_レ誇_二文章_一。蔡居謨。不_レ誇_二善_一。呂濟叔
不_レ誇_二暴_一。何公南。不_レ誇_二飲_一。任司馬。居
實。不_レ誇_二清_一。約大。低不_レ呈。則_レ誇_二也_一。
人情におおひ。数る事の後。数る事は。備へ
とて。かゝる事とす。

招徽垣

きこく。盗賊のた。先の。に。河。す。侯。餘。最。考。と。
貢院。由。圍。重。燧。皆。抑。棘。所以。杜。傳。遞。出。
入。之。弊。古。制。則。非。為。此。也。五代。史。和。凝。

傳。是時。進士。多。浮。薄。喜。為。喧。譁。以
勅。主。司。々々。存。取。榜。則。圍。之。以。棘。因。
省。門。疑。知。貢。舉。徽。棘。閉。門。而。士。皆。肅。
然。無。譁。所。取。稱。為。得。人。然。則。設。棘。
乃。放。榜。時。以。防。士。子。喧。噪。耳。と。り。ふ。又。
東。齋。託。事。に。世。傳。棘。能。辟。霜。蓬。能。
辟。沙。物理。相。感。也。有。道。生。處。則。沙。
不。聚。花。果。以。棘。圍。之。則。茂。と。り。ふ。と。り。ふ。
民間。に。植。り。盜。賊。防。ぎ。貢。院。に。植。り。

喧嘩故いす。田舎に植へ。花果故養ふ
たえたり

髪故結ふ

髪付さし。まるとより。髪故結ふに。その時。
その節に。結ふ。見の。かき。おのり。
南世女。宿業。高橋。子年。の。并。板。ま。れ。ご。も。三。十。年。お。
貞。享。二。年。乙。丑。月。廿。五。日。の。朝。記。す。に。その。ころ。髪。付。と。
り。の。あ。ま。り。し。し。や。な。膚。の。核。や。う。と。子。年。の。
り。の。ち。と。り。の。ほ。に。を。な。の。柳。より。入。子。神。故。お。

ちす。と。い。お。せん。が。か。ら。に。お。と。し。う。る。は。
き。髪。の。結。ひ。目。き。ら。ま。ら。し。げ。い。あ。る。が。見。故。
か。れ。め。だ。す。し。し。ま。る。し。お。め。あ。る。と。い。う。
角。ぐ。ま。り。基。高。く。お。り。故。故。か。し。や。の。肉。故。
え。と。が。あ。り。髪。故。追。し。う。あ。ま。り。の。髪。より。今。の。
は。き。ま。で。う。川。く。の。あ。ま。り。お。納。産。を。俄。
と。け。し。い。れ。故。さ。り。と。し。お。お。せん。家。に。
養。を。く。お。ま。り。の。は。且。形。及。柳。より。を。見。故。
な。お。し。と。い。う。く。は。あ。り。と。あ。る。と。あ。ま。り。

カセド。是、紙文に合點せず。さうら管を柶
から入子、柶のお尻ろろを何ろよ。いゝだららま託
七の柶め。柶せずにはいゝしく。柶れバ。柶文
ほどろろまのトヤ。と有。是ろろ(柶)付紙用ひ
ぬる紙をろろ。まろろを享保の末に。文
耕堂の作。三浦大助、紅梅、鞆トモとよ、伊賀
理に。柶付紙用ひろろまろろ。柶付ろろ、柶
柶ろろろろろろ。道奥、柶ろろろろろろの
ろろ。かろろろろろろ。山柶ろろろろ。かろろろろ

ろろろろろろ。と有。おろろろろろろろろろろろろろ
ろろろろろろ。ろの製。おろろろろろろろろろろろろ
ろ。柶にぬろ。柶の卵たまごのきろろろろろ。柶の柶、紙
トよりぬき通し。柶の中ろろせん紙ろろろろろろ。
又ろろろろろろのころろろ。柶の中ろろろろろろ。
ろろろろろろ。柶ろろろろろろ。柶ろろろろろろ。
懸細上もあ。天のころろろろろろ。柶不用ろろ
張ぬろろろろろろの形せろろろろろろ。寛政享
和のころろろろろろの形せろろろろろろ。柶

入れ片よのわちち坂し〜して法よのうら〜りるこ
これ坂たぼ〜り文作のころより驚を驚を共に
〜し〜し〜針を子細上〜下手ぬ〜といふまの
驚あ〜を解の弁使利えいれ下子古驚きの
〜も即座に驚ひ結するさんとこれを用ゆ
時〜すの外驚のまぬ〜やも〜〜〜迷きちり
として法〜〜た〜の〜〜〜中〜の驚き法
〜ら〜まの〜因ひ法と法とにおの〜のま
け〜のま〜し〜のま〜のま〜のま〜のま〜のま〜

後い〜ま〜ゆ〜やおほは法〜

籠の文字

世俗に〜籠の文字の籠の字と〜も
籠に油籠〜〜も有と。是れ〜籠と
陶器に〜善焼以善籠とす。籠籠青
義通方ゆ〜に。用ゆぬるあり。異の紙好む
善家問神佛の石燈籠に。籠の字取
用申。籠の籠と〜と〜。籠の字取
善〜し〜し〜。

酒の價

老ろくく酒の價の事。藝苑各言。又ハ
 野客著書に云ふれど云。古詩話と云
 べき。玉壺清話に。真宗嘗曲事。掌
 臣於太清樓。君臣雜談。笑舞間。忽
 問塵法。在佳者何處。中貴人奏有
 南仁和者。亟令進之。御賜宴席。
 上亦頗愛。問其價。中貴人以實對
 上。遽問近臣曰。唐酒價幾何。無

能對者。唯丁晉公奏曰。唐酒每升三十。
 上曰。安知。丁曰。臣嘗讀杜甫詩曰。釜
 就飲一斗酒。恰有三百青銅錢。是知
 一升三十緡。上大喜曰。甫之詩自可為
 一時之史。と云。因に云。恰と云。文字俗語
 と云。いふ詞に南朝有。人の志ると云。され
 ど云。此詩と云。此の所分好あり。
 せんといふ花
 葉の湯者流の生花。利ゆ故。せんといふ花

あり。その文字は云々。おもひく竹は竹乃
類のを志るせし。竹譜詳録に云々あり。
その花に似る。せん。云々。條に。籐竹
生。江浙。廣右。永。湘。間。甚多。枝。間。有
節。其。葉。似。桃。其。花。如。石。竹。差。大。丹
紅。一。苞。人。家。亦。有。盆。罈。内。種。者。俗。名。
翦。春。羅。と。り。せん。籐。を。類。す。以。云。類。也。
来。白。苞。の。花。云。云。作。り。お。と。せ。也。

耳露門

耳露門の語。葉。席の壁。上。と。凡。を。類
語。あり。佛。者。に。用。り。云。云。事。さ。ん。ど。も。葉
人。の。意。云。云。と。ぞ。席。に。坐。す。事。さ。り。云。云。
釈。迦。譜。に。り。し。是。時。世。尊。乃。受。其
請。即。詣。波。羅。奈。國。麻。苑。中。初。轉
法輪。世。尊。思。惟。我。年。耳。露。法。門。
誰。應。在。先。而。得。聞。者。と。り。よ。こ。の
ころ。と。ぞ。壁。の。處。に。し。け。を。さ。す。と。

佛一良機

東見註に。佛良機鐵炮の名のやうに
善ハ機より文字にあらざるやうに善申
佛良機ハ種々の語より類ひあつて玉の名
あり。明史三百二十三卷に。琉球呂宋暹
羅佛郎機諸國皆使奉貢。とあり
鉄炮の事くろくきハ南浦文集に見え
るやうにあらざるやうに也。

毛髮の辨

毛髮の文字あるを〜かざる。毛ハ一體

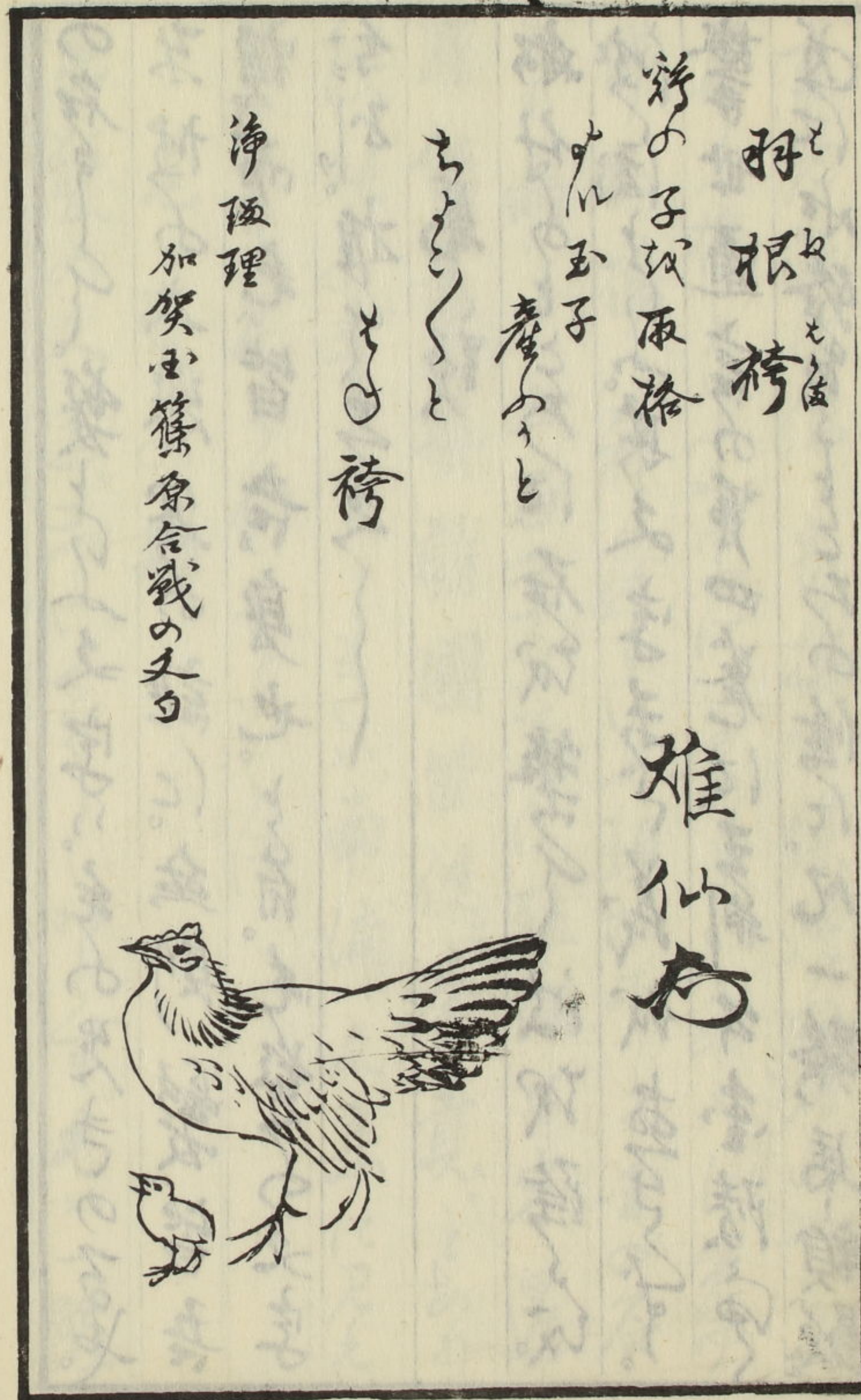
の名あり。髮より文字ハ毛の先きのる也。
東坡の大慈客の註に。無則髮皆吾
頭也。毛皆吾身也。と有。毛髮の文字
分別。推して去る〜

馬頭

船付のところに。石城築あけは切除るに。
波は〜。其又字未だ義成あらず。
警世通言の第四卷に。王荆公金陵中
道に。水路あり〜の條に。凡一路馬頭駁



衛山



羽根袴とね 七後

袴の子取格

めん玉子

麩のうと

ちよとくと

とりの袴

浄極理

加賀玉篠原合戦の又白

雉仙方

船之處。と有又作竜通致金書に。由馬頭
臨清、人馬頭、杭列、絲馬頭、儀真、船
馬頭、章樹、藥馬頭。と有又同語錄
に。舟之設屋、年門而入其門、謂之
馬門、必先闡、後而後能入、因其字
義、而稱之也。と云、船之進む事、故好む
也。馬の門より出ると云、意、故、取、馬門と
云。馬頭と云、波、波、馬頭と云、

東の野別

茶人者流。茶縁の短冊、詠州、或、珍、き、ま、れ、ど。
おけ、く、其、人、と、云、り、故、云、ぐ。東の左近、太、又、下、野
守、年、半、縁、比、文、明、の、と、ろ、勅、あ、ま、り、。教、道、故
傳、く、ま、る、と、り、。茶、縁、初、集、の、卷、末、に、系、圖
有、又、祖、代、と、和、教、家、と、り、。八、代、の、先、祖、東
六、郎、徹、行、の、教、と、り、。教、撰、に、入、り、。後、集、の、
後、撰、集、以、下、の、作、者、と、り、。中、院、為、家、の、
門、才、と、り、。我、門、第、一、の、人、と、稱、せ、ら、る、と、り、。人
才、の、法、名、或、素、暹、と、い、ひ、。其、子、六、郎、行、氏

法名宗道也。續拾遺以下の作者。其子氏
村東、下野守。法名詔阿。續千載集以
下の作者。東六郎師氏。法名宗宗。新
後拾遺集以下の作者。其子東式部少
輔胤綱。又名益之。法名宗明。其子氏
數。東六郎。法名宗一。新續古今集
の作者。其子幸徳。左近太夫下野守。實
胤綱の子ありと云々。此集の中に。宗祖あり
和歌歌傳秘りきりてにのみりてしむるに

有。又齋藤入道念念に。山田の斎。故押
せらむ。後十首のうゝ。紙よみんをうゝ。し
るの者。そのあり。うゝ。有。名。是言の
なり。

對のしげもの

よの中に。懸物の二幅對。三幅對とん。まてを
し。しげもの。しげもの。二か。しげもの。三幅
しげもの。しげもの。しげもの。三幅對
する。中ハ富士。左右三條。法。尺。寺。ち。とん。

元。一幅はしつまきぬ。多様画の故。又二つはく
 對するが。二つはくけ祿のきぬ故に。あくの画
 障子に。えりる。あまの画さる。是非この
 画に鬼の圖さるれば。やうに。あまの画あり。
 是次對のしつまきのま意より。今時の對の
 しつまきの故えり。三幅對のうち。一つは實に
 らし。故に。あまの画さる。是の對より。あまの画に何さ。
 是らる。唯二幅三幅。五集。一集に。あまの画
 入り。あまの画さる。對より。あまの画さる。あまの画さる。

あり。近衛家照るの法。説く。根註に。ふ
 九三幅對。二つはつ。四幅ハ幅對の。しつまきの
 表具ハ。その法あり。殊に三幅對の中
 限り。あまの画と。別に。あまの画の作法あり。あま
 對のしつまきの。あまの画の法。今も。大徳寺に。あま
 しつまきの。あまの画あり。今も。あまの画あり。あまの画あり。
 一幅の二幅の。あまの画あり。是の。あまの画あり。あまの画あり。
 二つはく。あまの画あり。あまの画あり。あまの画あり。あまの画あり。
 あり。あまの画あり。あまの画あり。あまの画あり。あまの画あり。

鷲の画のしきもの。是は天下の名物なり。毎夜
 三菩薩提院の足ておくし。と信じてん付るし。
 いうさぬまきさこ。つらまきづく。足筆のりりあり。
 され共。智角二幅の侍とんゆらり。毎夜
 三菩薩提院と。中し合せし。をさし。てうのり
 物に。添るる。沢庵の一巻何也。それ。是は珠
 光の珠光のき物なり。一紙。一かくら。これ。二か
 はこれ。ふと。きさこ。すね。いふ。うら。うら。きさき。
 二幅對の侍。お款。事。ゆ。い。の。あり。古。く。あ。り。の。

筆も甚し。丁寧なり。と見え。中。の。表。具。に
 九名の中紙。見ん。け。う。あ。く。上。を。つ。い。左。左。の
 一文。字。紙。中。に。つ。い。一文。一。列。を。の。あり。其。法
 廿七。を。あ。く。さ。き。ま。の。あり。と。有。い。と。ぬ。心。紙
 目。ひ。く。懸。物。の。彩。更。取。扱。ひ。す。き。さ。り。あり。世。に
 筆。筆。の。墨。跡。何。き。と。何。れ。ど。も。古。田。織。部。勇。著
 不。天下。の。名。物。と。い。五。幅。より。あり。ま。の。あり。一。か。く
 鳥。在。殿。一。か。く。摺。宗。綱。一。か。く。生。弱。雅。樂。頭。
 二。か。く。は。某。及。二。家。に。有。又。虚。巻。の。墨。跡。に。

首發鳴所持。又博宗易所持。又秀長も
有。此一軸も天下無双の數奇道具也。又道
隆の所持也。其後長是幽齋所持。又紹
鳴所持。其後末主賣の。大文字公業為所
持。又退院の詰也。博宗の所持とあり。其
の人所持。又遠磨七十年拈香也。宗所持
存。卯。平屋堂墨跡のわらわらと有。又
あるとの説に。玉洞の画ハ幅對のうら。平沙
落ハ珠光所持。江天草堂ハ周防山守

矣。玉洞。洞庭秋月也。博天王寺在道吃に有。漢村
夕照也。博油田常庵に有。遠浦帰帆ハ伊
達殿所持。其後小條友所持。其むくハ連夜
所宗長所持。其後今川義元友所持。ま
君澤の神農也。旋菜院に大同と下
昔珠光。二五と友の元兄ヤハと市付良。を寺
晚鐘。此一軸ハ幅のうら。其の項上あり。玉洞の
はの画。博宗久にあ。其繪襖ハ一換画之
玉洞の家の画。むく引。松所持。ハ画を襖ハ

横画一段数奇道具あり。これと惣て院后
の代に火に入ら申す。又松花堂の画は山樂
龍舟坊に寓居す。昭象これに倣ひて字も
其後牧溪の濃墨に学ぶ。牧溪といふ文字
有墨一挺重自不可移を執て沃庵和尚
取持松花堂あり。故松花堂に贈る也。これ
ありて松花堂の画は墨色に可任有りといふ
圓悟の墨跡也。東山及茶席に用ひらば
掛物ハみれ唐画あり。義我政公撰光の

室より。数茶道也。向りておのら。隆光
茶席に。圓悟克勤の墨跡也。これあり
茶席に墨跡也。用ひらば。圓悟より大徳
寺一流懸あり。茶人の好む尊あり。此墨
跡は一帛目録といふ書に。博伊勢を道如の
取持。この一軸をむく。殊光。一休和尚より
法らけ。墨跡あり。此并に今二幅あり。博
茶らや宗也。又一少の宗林形持あり。むく
質紙より。又此は。松花堂の茶道の本意也

予の秘藏す。顔輝の造磨の表装。甚
優美なるものなり。小田道の生誕地。我影と所
表装の宙より。紙くろく。二首の秘伝。甚き
この一幅より。茶紙。樂しき。風流のあまたき
事あり。有樂より。傳来。其世に。道八達。意のり。

惟朱惟馬

遵生八牋に。惟漆の法有。近湯家。照公の
玉の張紙。細き紙。張紙。楊枝。くわら。是
を。紙。き。又。く。の。誤。に。張。紙。は。子。深。く

彫る。楊枝。は。手。何。所。く。彫る。彫。名。さ。川。と。鑑。定
す。その。に。つ。ぎ。と。り。ふ。惟朱の。表装の。香。合。の。康
花。院。在。行。幸。の。時。能。何。彌。に。遠。柳。に。お
これ。時。見。以。時。秘。花。さ。れ。ば。と。り。所。少。と。り。入。れ
て。能。何。彌。に。真。に。時。流。有。く。天。下。一。物。あり
ま。の。花。の。形。より。内。の。黒。き。り。と。翠。竹。庵。道。の
香。道。秘。傳。の。表。に。有

やうの白角

茶人者流の表に。四角。甚き。の。よ。の。方

うろく遠なる飯すべし。葉又角と書く。昔の道具取扱のすまもの。葉入といふ文字は、刃の形をきて。きりねをその意にきかず。去りころ古田織部が文に四方入と書き、ころ丸角きりす四方ころと遠くこれ四方入と書き、ころころきりころころのころころの書得りころん又書き取るころころや

遊撃手兵器

兵器茶椀に紅葉。大徳寺尼が裏面。維

遊撃手といふは、手形有遊撃手といふ。沈惟敬の筆法にせし紙。茶の湯の茶椀に刃のしり。名法をとりよ。あるは沈惟敬の遊撃手軍をいふ。遊撃手兵器といふなり。甲乙割言に。沈惟敬以落鬼橋富燕中。傍有間屋。使賣水擔子沈嘉旺居之。嘉旺本樂清道。希吉家蒼頭。幼為倭奴所掠。載還日本。凡十八載。泛海而還。復走燕。依道遙無用之故。賣水以自給。

惟敬暇則時々從嘉狂談夷中情俗雖
各什御語言不有恣會石大司馬徑畧
東車而在寵非之父表某恒從惟敬游
惟敬日與表言夷中事若身至之者表
以告石之遂召與相見與語大悅遂奏
受游擊將軍使日本而有封真之說矣
惟敬妻姓陳名澹如女故倡也惟敬遠使
石每到門慰籍至以沈夫人呼之真可
謂能下賤矣莫下非其所當下為可

勝身。とりふ秋一季の。遊擊將軍のる以子因
抄せしむる。

柿 蒂の棠梳

棠、と唇棠梳の極品也。柿の蒂、とりふの棠梳故
見るに。柿の葉ととけりきととろき。樂天の
枕詞、春中の詩、又多に。紅袖織綾誇柿
蒂。まろ活酒。越梨花。柿蒂指綾之
紋也。と唇棠詩話の極に有。香甚服の葉。
火の二合より。織綾、光きしと成りましや。

一日に二食

世俗三食の食より改。三食の朝夕アサヨと云ふ。食するは
 朝アサ符二食のものを云ふ。つらつら三食に云ふ
 きれど。言葉の朝夕改食すると。浮ウキするもの
 強き也。茶の湯の湯に。利休番士の時代を
 二食と云ふ。この刻ころ故晝飯と云ふ。申時故
 夕飯と云ふ。又故に晝の茶の湯と云ふ。この刻
 時が改り。南時一日に三食を改。申時ウチノチひま
 茶と云ふ。午と云ふ。ぬと云ふ。又一日に二食

と云ふ。武者物語に。凡一人ある。高寺を
 一きき。一日に二食と云ふ。是故に
 一人と云ふ。ある。ある。

茶の湯のたもつ

吉田織部ヨシタオリ。名物のたもつ。割ワと云ふ。是故
 継合ツグイと云ふ。面オモと云ふ。一人と云ふ。此のたもつ
 一人のやうに。茶の湯と云ふ。吉田織部の茶の湯
 吉田織部に。茶の湯と云ふ。大急オホイ。裏ウラの二
 重フタヘの小袖コスode。説ワカの印イ活キと云ふ。の布子ヌシ。裏ウラの二

程々の
 二七五
 二七五
 二七五

又唯の本街ゆの子紙。濃き湯煮ししをよ
く。袴おほむ。袖少くもえん。すきくた更し。
怒角新しきぶすく。せくくゆく時ゆ
おまひふく。又佐の紙子。もえんはきん
よく。そ時ゆの佐のすく。紙古織に尺せし。
考のゆ法。割の尻をいふべし。

茶の湯

太平記十九巻に。其ころ物丸兼一ぬ田舎のま
ど。茶の會。酒煮のゆり。るるる物紙

と有。又十四巻に茶の會。酒煮に若干の費
ゆれと有。廿二巻に今日、連袂の湯會。序
その。唯今の茶會の最中。まふ。一を
對面せざる。又三十三巻に。在茶の大名衆
け結ん。茶の會紙と。先。り。奇合。法計
ゆあり。中具。茶煮。又。博。奔。紙。く。遊
ひ。紙。と。有。これ。み。茶。と。い。て。茶。の。自
ひ。き。と。紙。く。時。原。と。せ。し。あり。今。時。の
茶の湯。と。い。ふ。ま。り。車。浦。文。集。に。考。ふ

へき又あり。今の茶の湯の。老談一言記に。茶
の湯の事。東山及数奇好玉のひりより起る
る。其ころね軍家諸大在に茶に四角くさ
解^たす。こきやうれむ。五山僧の茶に法不
老^ろに。つゝののさく。今下ると茶の湯と
試^しし。もて真一信をぬ。其道誠存人。珠光
と。僧侍と。一^しと。あらぶ。のさの免せと。
是の出頭して。数奇の法製と。定免と。茶の
其傍と。用と。純子の切ると。珠光純子と。

今に世人室とす。款あり。珠光誠俗人のやると
と。東都の稱名寺の住僧と。浄土宗と
え。なり。珠光の事と。出頭と。後、お軍家
の信と。還俗と。又あり。の説に。紹興
利休の時代より茶の中と稱ず。佛家奠湯。
奠茶に界と。茶湯と。これに混ぜと。
茶の中と。さめと。

と。磁きめのよ

根誌に。利休所持きめの花と。前に

ることに。夫れ銘に有て。それ故にすむらふ。あ
 して有。利休のちのすきとふらひをうら。やまきもの
 手ぐらひらる。心得るべきるあり。桑葉あは
 べきに。其れはのあはれに。利休きめり。と名付
 けし人。響あるとらふあり。西院の勅
 録に。千尋とらふ有。持月千尋入夢と
 ふ白より思をうきありとらふ。銘に付るが有
 べきるあり。茶村南軒もどる。墨筒の花
 生製製作せし銘に。秋に終。又ハ秋の終。

あといふ有。垂よりとらふあり。又ちきとらふ
 招刺有馬郡。石井と三島の家と有。白
 赤梅檀とらふ。ぶ堂とらふ。銘に終ひに
 舞衣といふ。師銘をいふとらふ。是ハ白のあとい
 してろ改うすきとらふ。思をうきあり。ことに。又こ
 ろうすきもの。に白やまきの。よのたの名。終ひに
 これハ古終に見らう。す師終とらふ。一國といふ
 ちといふ。香一柱サワラとらふ。けり。新終古今
 集に。と終とらふ。終とらふ。とらふ。香とらふ。及

うねとよしうきり又其花とよし一種の香あり。これハ
 伽羅より。引新八新拾遺集に。夏花其にむねハ
 けく花の如くしてはむねハけくしてはむねハけくしてはむねハ
 其花とよし名。三行あるはけくしてはむねハけくしてはむねハ
 又名香に禮馬とよし有。この香白いうきり
 かくら名つけしきり。荷^を負ひしきりしきりしきり
 伽羅に月とよし名香あり。雅富王の位に。月と名つくる
 る。け香つくより年々を月一香より。遠近より
 薫るまれば。月と銘すとの別ハ又葉人者流の葉

檜枝作^りしきり有。享保十八年五月十九日
 了。一。樂燈師九入道の作の葉檜。箱入の
 或百のうちの銘紙千の如心齋名るといふ
 有。その中に黒葉檜枝高砂とす。赤葉檜枝
 低^い砂とす。低^い砂とす何にありしきりやむねハ
 ぬし。又赤葉檜枝に又苑芙蓉とよし有
 本の弁題紙何ゆつに銘とせしや。ふ風流
 を熟するきりしきり。又青いハ銘する付きき
 了きり。

説書

少き味も、さへ先て年けは、
 八の身は、
 あり。又、
 年々、
 傾城と、
 仁舎の詩は、
 黛明鏡又堪憐、
 羨華一愛樂一時

夢、昔作北却山上、
 其の雨の、
 唐人の、
 尺牘有、
 到港一踏平安、
 殊出、
 錦腰邊、
 来崎帯出、
 在朱相公山、
 送糖五

伯斤。祈查收。是禱。諸惟恐重。自愛為
囑。並向。有。家名。の。と。ろ。に。山。科。近。好。不
備。と。考。侍。に。軍。英。山。均。問。侯。と。又
若。崎。の。唐。々。廿。片。の。許。より。贈。と。又
傍。あり。恭。啓。者。春。浪。生。緑。晨。風。吹。花。雅
蚤。在。畜。英。鸚。囀。樹。感。時。思。遠。情。緒。琴
々。如。亂。絲。客。歲。干。官。家。拜。別。深。困。日
夜。待。信。不。至。初。思。到。崎。畠。係。事。件
之。態。再。思。官。家。何。故。脊。別。時。之。號。言

崎。畠。花。柳。々。春。色。想。今。曉。江。南。平。賦
毒。日。夜。未。令。九。拜。祈。官。家。之。萬。福
慈。嚴。壯。健。在。堂。服。食。安。穩。大。嫂。喜。未
有。眼。疾。幸。杖。不。得。賜。妾。子。寢。寅。起
不。遑。干。梳。髮。補。針。官。家。有。不。盡。公
掙。何。急。一。封。之。好。信。若。是。或。有。事。急
乎。又。深。所。懸。念。以。東。以。西。深。為。疑。也
情。難。盡。干。辭。孫。官。家。玉。案。下。賦。毒
采。華。九。拜。と。子。有。又。何。と。の。家。と。い

未せしもの也。多花のやも有る。いさうとて煉
 け。垢けらるるをよみず。され目付むやうぬるま
 あり。これいぬるなる。二の三箱ふりれて太切
 不せしものなり。花生るとえを好む者。伊
 来のあるものなり。存器のやうき紙好むる
 事。法利。浄室の類は土中に之を埋れ。
 土葉改まれば。自ら花改まらふなり。ま
 といま意なり。継古葉編に古銅花瓶入
 土年久受土葉深以之養花。花を鮮

表定道
 瓶史古銅
 器入生年
 之受土氣
 深用以養
 花を鮮
 明如枝
 年遠而謝
 運瓶結實
 陶器亦然
 故知瓶之
 實古者
 獨以玩

明。或瓶結實。陶玉亦然。其式以膽瓶
 小方瓶為最。若養蘭蕙復用甌。牡
 丹則用蒲槌瓶。方梅瓶內復打仍
 套管。叔口作一小孔。以管束花枝。不
 令斜倒。又可浮添水。挿牡丹芙蓉
 等花。冬天貯水。挿花則不凍。損
 瓶。莫とよ謀に心成用ゆる事かとの
 と。今時の人後に心の所在すこと
 人の責をすに改む。古物好む者

く外ならず。よく似て教むる野有。くお集
りて而ふおうき野有。うら無し
みれ。為ふ。け時侍に石火先も動せぬ
聲。軍兵。さる。城。を。そ。と。に。い。ふ。く
い。お。ま。し。今。我。ま。い。あ。ま。の。を。れ。
軍。え。と。ま。の。に。ま。と。え。す。ら。あ。は。ら。ば。何。お
お。く。く。を。ら。紙。を。え。す。お。く。く。い。さ。と
甲。少。に。聲。の。し。お。影。ハ。一。白。し。軍。之。福。と。え。大。勢。の
く。笑。ひ。あ。る。友。ま。お。う。き。に。お。透。ら。あ

ら。と。あ。の。ひ。け。り。ゆ。つ。ひ。さ。あ。の。さ。り。と。い。ふ。
ま。き。花。蓋。紙。好。む。人。心。紙。用。ひ。ぬ。時。の。か。の。聲。
に。お。き。し。と。い。ふ。

北斗

北斗。故。り。に。北。極。紙。け。り。又。破。軍。星。紙
さ。す。ま。の。有。北。斗。と。い。ふ。二。十。八。宿。中。の。斗。星
紙。さ。す。ま。の。有。示。兒。編。に。二。十。八。宿。以。四。方。
為。名。者。唯。井。壁。箕。斗。曲。星。而。已。營。室
者。天。子。之。宮。壁。者。室。之。外。院。離。宮

在南則壁在室東故稱東壁。參旁有玉井則井星在參東故稱東井。箕斗是人日用之器相對而言箕在南而斗在北故曰南箕北斗也。人南箕故稱斗。北極温下。

紫の乾西施舌

河豚故西施乳とす。或る人の巧み福く去るるをいふ。示兒編に著す。或る故抄す。

江淮有河豚。目腹腫為西施乳。福列嶺口有蛤。閩人號其可脆為西施舌。故東坡居常州願嗜河豚。而里中士太之家有奴於烹是魚者。招東坡亨之。婦子傾室闔於屏間。冀一語品題。東坡下箸大嚼。寂如暗者。闔者矣。望相顧。東坡忽下箸云也。直一死於是。令舍大悅。噫東坡誠有味其言。使嗜乞如嗜河豚者而不

知戒皆不免於死。噫。东坡誠有味其言。
と云。西施舌。比蛤のこもをけりぬや。白泉南
雜志曰。舌。殼似蛤而長。卵包。蒸水
畔。肉色如乳。翠。肉白似乳。形酷肖
舌。闊約大指長。及二寸。味極鮮。養
と云

七哀

霽山集。寄懷の程に七哀詩。始於曹
子建。其次則王仲宣。張孟陽也。釋

詩者。謂痛而哀。感而哀。然而哀。耳
目聞見而哀。口歎而哀。鼻酸而哀。
謂一事而七者具也。

石點頭

けき者の註に。虎丘寺有。生公講堂。昔異
僧竺道生者。講經於此。無人信之。乃
聚石為徒。與談。至理。石皆點頭。予
と云。小説の考に。石點頭と云。亦題有。
この古くよき也。故故事におけりとの

影のさすれどもや。石照の影とす。少説の序
文に之をいふる所す

倒影

東都東寺の塔の影。遂にうける事。若人
とるるとあり。五雜俎も之申。又齋山集。
虚空寺の塔の中に。或言寺橋有窓以衣
幕之。則見有塔影顛倒也。又步歷
野獲編に。嘗耳暗處視明。則影
皆倒垂也。實不然。南末牛首山寺。

塔。其影獨照伽藍殿上。供棹倒立甚
分明也。他處則不然。北末彰義門
外。天寧寺塔。每於殿門偃時。亦觀之
其影亦倒。而他寺有塔者。以試之。則正
現如故也。物理之不可曉。如此と有るを
いふものあり。又申。影藝園日録に之を
く有るをいふるあり。

石炭

九州邊より。多く用ゆ。石すといふもの

存。山中より採りて石あり。むらさき色なる
に。黒色あり。勢もさう。馬におさる。其香
高臭く。難徳ものなり。これごとく。近年
節候家。又ハ綴^カ冷の執用ゆゑあり。浪
華^カ後多製する多し。漢土^カも有るあり。
金樓子にこれ。故煨石と云ふ。豫章^カ有
木石。漢之可^カ以^カ燃^カと有

摺紳

摺紳の文字。多く縉の字改用ゆ。漢

土より著遠ひしもの也。陳繼儒の羣碎
録に。摺紳^カ摺^カ紳^カ。笏^カ於紳^カ。大帶也。
摺紳^カ今作^カ縉^カ。帛^カ赤色^カ也。

着本の法

原^カ着^カに。着^カ本の法^カ。これ不辨
唐の著^カ。割れ有。其^カ之^カに。故^カ石^カ江^カ南^カの好
多^カし。所^カ無^カ。梅^カの一名^カなり。紙^カに。梅^カ
と。よ^カと。磨^カ滅^カせ^カ。や^カに。申^カ。梅^カと。著^カと。故^カ
後に。梅^カと。申^カと。せ^カ。これ^カの^カ。これ^カの^カ。原^カ氏

寸白の巻に。善事のつくらはきり免ふといふるに
附會せしむる。二日月を善くは梅たるま
え多しといふ。何れも説あるをたに見ゆ。

陶土新書第二卷終

